

南宋時代の水陸画について

—水陸儀軌の変遷を手掛かりに—

高志 緑 (大阪大学)

水陸画とは、罪障懺悔や施食を目的とした水陸会という仏教儀礼の本尊であり、法会において上堂と下堂に招請される多数の尊格を幾幅にもわたって描いたものである。南宋時代の水陸画は一具のうち的一部分しか現存せず、描かれる尊格の名前を冠して別名で伝わっている。現在、南宋時代の水陸画と見なしうる作品は、米国・個人蔵《諸尊降臨図》一幅、京都・知恩院蔵《羅漢集会図》二幅、奈良国立博物館蔵《十八羅漢図》一幅、大阪・弘川寺蔵《地藏十王図》一幅、滋賀・新知恩院蔵《六道絵》六幅、愛知・瑞泉寺蔵《伝星宿図》二幅、滋賀・宝厳寺蔵《北斗九星像》、米国・ボストン美術館蔵《三官図》三幅の八作品、計十七幅である。

南宋時代の水陸会は、浙江省寧波の東銭湖畔で、初めは宰相を辞した居士である史浩(1106-1194)が撰述した儀軌をもとに、終わり頃には史浩の儀軌を改訂した天台僧志磐(1269-)の儀軌をもとに行われていた。儀軌はどちらも現存せず、仏教学の研究では、明代に改訂を加えられた志磐撰・株宏重訂の水陸儀軌が志磐の儀軌の原状に最も近いものとされ、水陸画の先行研究では、画題の典拠として主に志磐撰・株宏重訂の儀軌が参照されてきた。しかし、南宋時代の水陸会の時代性・地域性に踏み込んだ研究が十分になされているとはいえず、志磐が改訂する前に史浩がどのような水陸会を実施していたかを考慮する必要があると思われる。本発表では、南宋時代の水陸画の解釈を深めるために、文献資料を通じて史浩が行っていた水陸会の様相を探り、北宋期に南京や四川省で蘇軾や楊鏐といった士大夫官僚が行っていた梁の武帝由来の水陸会が踏襲されていた可能性を指摘したい。

史浩が範としたと考えられる蘇軾や楊鏐の水陸会では、上堂に仏・法・僧・菩薩・縁覚・声聞・神仙・護法天の八位を、下堂に政治家や六道に属する者、六道外者たちの八位を招請しており、史浩は水陸会のために十界の像を設けたという。ここから、史浩は合計十六位の尊格を仏・菩薩・縁覚・声聞・六道からなる十界図に収めるべく、いくつかの尊格を一幅にまとめて描いた可能性が考えられる。《諸尊降臨図》には、多数の如来と経巻を背負う僧が描かれており、蘇軾や楊鏐の水陸会で連続して招請されていた仏・法・僧を一幅にまとめて表現したものと見なしうる。また、《羅漢集会図》については二幅に描かれる羅漢の表現に差異が設けられていることから、それぞれ水陸会で区別して招請される縁覚・声聞を表現したものと解釈し、形式的に似通った両作品が、史浩が発願した水陸画の形をとどめるものである可能性を指摘する。史浩の水陸会は1173~1189年の間に始まり1200年代半ば頃まで行われていたと考えられ、絵画様式からうかがえる年代観とも一致すると思われる。さらに、史浩の儀軌から志磐の儀軌への改訂に伴う変更点に留意し、他の作品の多くが志磐の儀軌以降の水陸画の作例である可能性にも言及したい。